

## 選考委員会総評

委員長 細江英公（ほそえ えいこう）

今年もまた林忠彦賞の審査が無事終了しました。毎年のことながら全体の作品レベルは非常に高く、毎年私はいつも期待をもって参加しております。同時にいつも期待を裏切らない形でいろいろな作品が集まります。

周南市がされる林忠彦賞の場合特徴的なことは、自分で写真集をお出しになっているケースが多いことです。これはやはり林忠彦先生という天才的な写真家、写真ジャーナリストと言っても良いかもしれない、つまりジャーナリスティックな観点から写真を撮る、世相を切り取る、あるいは人物を切り取る、というような観点から作る林先生の写真との血の繋がりを感ずるとでもいうべきですか、林先生の弟子、その弟子の弟子…というような形で写真が作られている、そういう伝統的な厚みというものがあると感じます。ただ写真が好きだから、上手だからというだけで写真は生まれるものではありません。やはり作品に重みというものを感知させる、そういう作品が多く寄せられていると思います。

こうしたものは非常に重要な現代の文化的財産ですから、周南市がこの文化的財産といえる受賞作品を収蔵し、美術博物館の重要なコレクションの中に入れていくということは、ものすごく意味をもってくるんですね。写真というものは、これから10年後、50年後、あるいは100年後、年を重ねれば重ねるほど、古くなればなるほどその意味が重くなる、そういう特質を持っています。現代の日本の状況とか世相、そういうものは年を積み重ねれば重なるほど歴史性、記録性という大きな価値がありますので、その時代の写真の意味と価値が大きく膨れ上がるんですね。例えば50年後100年後に、自分の生まれ育った周南市が昔はこうであったという、単純にその時代の世相を見せるのではなく、その時の写真家の表現力といったようなものを見ることができる。それは周南市に生まれた市民にとっても非常に誇らしい事実として残るわけです。ですから今日の写真を撮りきるということは、将来、未来にわたって力を繋げていくという意味合いを持つわけです。どうぞ大いに写真を活用して、将来の周南市民の人たちへ、もちろんそれを超えて日本全国、あるいは世界へというふうな形で引き継いでいってほしいと思います。私は長年、周南市の林忠彦賞の選考委員をさせていただいて、今までの作品の中からそれを十分に感じ取ることができました。これもやはり林忠彦さんという優れた写真家を生み育てた、そういう土壌がここにはっきりと表れているというふうに思います。

今回の林忠彦賞は船尾修さんの「フィリピン残留日本人」が受賞しました。戦争が終わってもう70年です。70年あるいは80年前、フィリピンは太平洋戦争の中心地のような大変な場所でした。しかし戦前からそこに移住しその土地にいついて、フィリピンの女性と結婚して子どもが生まれて、といった方々がかなりいたんですね。けれど戦後、その子どもたちはフィリピンの国民として、日本人が父親であるということをはっきりと表に出すことができない人もいたでしょう。そういうことを胸にしまいながら大きくなり、結婚して子どもが生まれる。そうやって代々繋がってゆく家系の中に、日本人の血が混じっているという方々が結構いらっしゃる。そして「フィリピン残留日本人」という、そのものズバリのタイトルの素晴らしい写真集をお作りになった船尾修さんが今年の林忠彦賞に選ばれたわけです。

いずれは自分も写真集を出したいと願っている方はたくさんおられます。写真好きだから写真を撮る、それはいいんです。おじいちゃんが孫の写真を撮るのは当たり前、それは撮ってあげたらいいんです。そしておじいちゃんが写真集を作るということも十分可能なわけです。けれど写真は芸術の一つ、特に

現代芸術の中の重要なポジションを得ているので、どうぞ自分の写真術の腕前を上げてください。そのためにはまず勉強することです。それは人の写真集を見るということです。もちろんプロフェッショナルな素晴らしい写真家の写真・写真集から学ぶことも多いですが、アマチュアでありながら自分の作品集を出しているという方もたくさんいらっしゃいますので、こうした良いお手本をぜひ使っていただきたい。そして写真集を作る目的で写真を撮り、学び、応募する。目標を超えたらさらに次の写真集を作る、さらにまた作る、そして自分の作品が生まれる、というようなこともありますので、ぜひ写真集を目標にやってください。そして写真集を目標にするけれども、コンテストというものも人の目に触れ、批評されるでしょう。そういう機会をたくさん持つことによって、自分の作品を鍛え上げていく、腕を磨くことができるわけですから、まず写真集を作るということを目指し、そしてコンテストに入選する。両方を目標にし、そしてさらにそれをどんどん積み重ねていって、ぜひぜひ写真を通して文化の深いところに足を踏み入れていただきたいと思います。